

悩み・苦痛の逆療法

第1部 解脱の真理の発見

(40) 熟練の技は盗まなければ習得できないか

-大悟か小悟か-

悟りには、大きく悟る大悟と小さく悟る小悟とがある。もっとも小悟とは、私の造語である。前述の項で詳細に説明したが、十牛図という悟りの段階図が中国にあるが、悟りにもこのように段階がある。第十図は大悟と言ってよいであろう。第五図前後であれば、小悟であろう。この大悟・小悟は技能工の熟練の技の習得と似たところがある。従って、理解しやすいようにこの熟練の技の習得を例にして説明する。

昔から名工の技は教えるものではなく、弟子には師匠から技を盗むものとされてきた。確かに、微妙な技は、口頭では教えにくいものがあり、教えないで本人の創意工夫に任せた方が真の名工に達することもある。しかし、現在の技能工は、科学的管理法（IE）の動作研究（モーションスタディー）なども行い、熟練者の技を分解して、更に合理化した動作にして標準化して作業手順を確立する。そしてその手順を系統立った教育訓練で、効率よく技能伝授している。

もちろん、作業における微妙な力の入れ具合とかは、習得者自らの試行錯誤とか、自らの工夫が必要であることは間違いない。しかし、昔のように何も教えずに、ただ師匠の作業を見ていて習うことに比べれば、短期間で大勢の人が習得できるのである。ただし、現在の習得法であると、真の熟練者は育たないということはある。しかし、多くの初心者を短期間で育成するには、現在の方法が必要なのである。

これと同様に、悟りにもこのような効率的な伝授方がないかということが、テーマである。そもそも、悟りは、「不立文字」であって、説明できないという。そのことのために、禅においては、限られた人間しか悟れない、すなわち、小乗仏教であると言われている。これに対して、浄土真宗のように「念仏をと

えれば誰でも成仏できる」という大乘仏教もある。

私は、中乗仏教があっても良いと考える。この中乗という意味は、悟れる人間の数が中位という意味とともに、悟りの程度が中位、すなわち私の言うところの小悟ということである。確かに、悟りにおいても、技の伝授と同じく、あるいは、それ以上に、ヒントを与えない方が大悟するということがあるかも知れない。

しかし、悟りのヒントなり、プロセスを示さないと、悟るのに長年月かかったり、大部分の人が悟りに至れないことになるのである。私が提唱する「苦痛を意識し噛みしめ味わい更には強める」ことが見性・悟りの道しるべ、すなわちヒント・プロセスであるということ意識して、実践すると、大悟はしないで小悟となるということはあるかも知れない。大悟というものは、本人が大きく惑い悩んだ末に到達できるのであって、大きな悩みのないところには大悟はないということもあろう。

しかし、小悟であっても、煩惱の軽減には、相当に効果があるのである。私自信としても、もし若い頃に、二つの選択肢を示されて、一つは大悟であるが長期間の苦難と大悟しない高い確率があり、もう一つは小悟であるが短い苦難と小悟する高い確率のどちらを選ぶかと言われたならば、迷うことなく、小悟を選んだ。

それとともに、「苦痛を噛みしめ味わう」というヒント・プロセスを実践しても、大悟に到達できる可能性は、そんなに低いとも思えないのである。なぜならば、このことは、人間に本来的に具わった心性を実践することであるからであり、まさに見性、すなわち、自己に本来具わった心性を徹見することだからである。現に、私の悩み解決法とほぼ同じである達磨の教えにより弟子で初心者の慧可は大悟しているのである。それとともに、苦痛を意識し噛みしめることは、習練を必要とするものであり、まさに頭で分かるだけでなく、体で分かることにもなるからである。そして、最低限言えることは、初心者を惑わせる多くの禅の言葉よりも、「苦痛を噛みしめ味わい更には強める」という言葉の方が、初心者にとって有意義である。

これを短歌にすると、

小悟でも 煩惱解脱の 功德あり

苦痛嚙みしめ 更には強めよ

となる。